様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９７６０４１７
研究課題名（和文）　英国の都市協会の活動を対象としたシビックプライド醸成のための都市保全・創造史研究
研究課題名（英文）　Study on planning history for civic pride focusing on the activities of civic societies in the U.K.

研究代表者
中島　直人(NAKAJIMA NAOTO)
東京大学・大学院工学系研究科・助教
研究者番号　30345079

研究成果の概要：
イギリスにおいて、20 世紀前半に設立されて、現在まで活動を続けている都市協会について、その設立期を中心に、活動理念や活動実態を文献資料調査によって明らかにした。特に、設立期の都市協会に見られる都市計画そのものの理念や技術を先行的に提示し世論を喚起し、行政を導いていく役割は、現代の協働のまちづくりのあり方にも示唆を与える。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,400,000	180,000	1,580,000

研究分野：都市計画史
科研費の分科・細目：建築学・都市計画・建築計画
キーワード：市民協会、都市美運動、シヴィックプライド、イギリス、都市計画史、

１．研究開始当初の背景

現在、我が国の都市計画やまちづくりは「協働」の時代を迎えている。今後の長期の展望のためには、都市計画の主体、市民協働のあり方についての歴史的展望が必要であるし、市民主導のまちづくりを基礎付けるシヴィック・プライドの醸成手法について検討を深める必要がある。本研究では、そうした検討の素材として、イギリスにおける市民協会の活動の歴史に着目する。

２．研究の目的

本研究では、1910 年代から 1920 年代にかけて設立された英国の都市協会（civic society）の設立意図や経緯、活動実態や理念を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

下記の機関を訪問し、文献資料調査を実施した。

大英図書館、ロンドン大学中央図書館、ロンドン経済大学図書館、ロンドン協会図書館、バーミンガム大学中央図書館、バーミンガム中央図書館、オックスフォード大学ボドライアン図書館、リヴァプール文書館、ウェスト・ヨークシャー公文書館、ブリストル文書館、カーディフ中央図書館

４．研究成果

（１）都市協会論と先導的都市協会

①アバークロンビーの都市協会論

リヴァプール都市組合の草創期からの主要会員でもあったアバークロンビーは、都市協会と行政との関係に紙幅を割いた。強調したのは、行政があらゆる発展計画の主体となるべきで、都市協会はそれを補完する役割を担うという点であった。そうした説明に加えて、セントルイス都市連盟を代表とするアメリカにおける活動的な市民組織を例に挙げながらも、政治的汚職の横行、メリットシステムとされる議会といった特殊アメリカ的状況を持たないイギリスにおいて、なぜ非党派的な都市協会が必要なのか、という問いに対しても、地方行政にまで中央政府の影響を及ぶようになった中央集権的な状況の改善を理由として提示した。戦時中に実施された過度な中央集権に、地方のパトリオティズムの喪失、一点集中型組織の脆弱性を見てとったアバークロンビーは、都市協会の活動によって市民意識が高まり、地方の発展の基礎となる地方分権が進むことを期待していたのである。ただし、都市協会と全国レベルの組織との連携は、活動の質の確保という点で必要であるとした。

また、活動エリアについては、すでに市街化が過度に進んでいる大都市で先に運動が展開すること、行政界よりは自然な地域（region）を対象とすべきこと、協会の目標については、機能をコミュニティの生活の物的側面に限定し、純粋に商業的、社会的な問題は他の組織に任せるようにすること、都市計画法がうたう衛生、アメニティ、利便性が都市協会の活動の基本となることなどを提案している。

活動の手段としては、１都市地域調査、２総合計画、３常設・臨時委員会、４芸術審査会、５区・地区組織を挙げた。中でも、１の都市地域調査については、都市協会の提案に対して行政の真剣な検討を引き出すための、最も基礎的な活動であるとして重視した。専門官僚ではなく、都市協会が実施することで、調査自体の一般へのアピール効果、行政に不都合な点の解明などの利点があるとした。また、４についても極めて重要な仕事であると言及していた。

組織構成については数よりも人選こそが都市協会の重みにとって重要と、注意を喚起した。また、すぐとりかかるべき事項として、戦争記念碑とともに、コミュニティのニーズを探り、行政が取り組んでいる都市計画や住宅計画が正しく実行されるようにすることを挙げた。

アバークロンビーは、全国組織との連携や活動エリア、区・地区委員会の有効性を示すために、リヴァプール都市組合の活動を紹介した。総合計画については、ロンドン協会の大ロンドン発展計画をあげた。バーミンガム都市協会については、「趣きの問題の特定の権威として出しゃばるのではなく、趣きが問題としてとりあげるべきものであるということを主張する」という発言を弱腰過ぎるとして、より強気の活動を鼓舞した。この時点では、バーミンガム都市協会は芸術諮問委員会の設置を実現させていなかった。

②ブランフォード夫人の都市協会論

Ｐ．ゲデスの愛弟子のＶ．ブランフォードの夫人Ｓ．ブランフォードは、1923 年 3 月のロンドン社会学会都市委員会主催の都市協会会議の前後に、二つの論考を著した。

前者は都市協会会議の開催告知のために、「都市協会運動」の具体例を紹介する内容で、運動の起点を 1905 年の社会学会でのゲデスと新聞記者 A.W. スティルとのやりとりの中での自発的結社の思想に置きつつも、その運動はロンドン協会が先導したものだと述べた。そして、都市計画の促進、田園都市の原理の利点へ注目したリヴァプール都市組合、土地購入を積極的に実施しているバーミンガム都市協会をまず紹介し、その後、加えて、リーズ都市協会、リッチモンド都市協会、ノッチングハム都市協会、ダブリン協会、プロ・エルサレム協会などについても言及した。

後者では、ブランフォードは、都市協会の目的を「物的環境が再興に値するそれ自身の伝統を最大限に発揮し、発展させることで、各地域、地区のために各都市に文化の中心をつくること」とし、その背景に、現代のコミュニケーションの容易さがもたらす過大な中央集権化、地方の特色の喪失による単調化と同一化の傾向、中央政府による地方の自由への抑圧、地方性への関心の欠如等、つまりは市民意識とプライドの喪失という事態を見てとっていた。

さらに、ブランフォードは「現代の都市は、コミュニティではない。それ自身を表現する中心の炎が消えている。」という危機を論じ、市民意識を、イタリアの中世都市、ギリシャの古代都市と結びつける一方で、キリスト教的精神とも関連付けて、「地方の忠義の古代的な概念をキリスト教の伝統によって現代のわれわれのものに転換して新しくすること」が都市協会の仕事だとした。「都市協会は、このように都市の精神とよぶかもしれないものを発見し、維持し、発展させるために存在している。その精神は、必然的に都市そのものと同様に多様なものであるが、ある共通のチャンネルを通して、表現される必要がある。」とし、都市の物的環境の重要性、公共性に言及した。そして、都市協会にとって調査は基本であるとした。この論考では自身が創立に関与したリッチモンド都市協会が、都市協会内の委員構成の例としてわずかに言及されるに留まった。

③W．ヘイウッドの都市協会論

ヘイウッドは、「都市改善の外観表現の現代的発展」の中に、都市協会を位置づけた。アメリカにおける芸術委員会を中心とした都市改善の動きについて論じた後、「都市改善はこの国では都市協会の領分である」として、都市協会の端緒としてリヴァプール都市組合、更に素晴らしい仕事をしているとしてロンドン協会の活動を紹介した。

ヘイウッドは、地方都市での都市協会の活動の困難さを指摘しつつ、「世論が都市のアメニティへの関心の増大へ方向転換している」と指摘した。そして、都市協会がとるべき方策として、１．明らかにアメニティに好意的な政策を持つ議員の支援を要求する運動をおこす、２．現在の状況が確かな目標に向かっているならば、既存の状態において諮問機関として機能する、の二つがあり、アメリカでは１の方法が有効であるが、イギリスではイギリス人の心性や行政の状態からして、２の方法を採用すべきと論じた。

そして、こうした一般的な説明のあとに、バーミンガム都市協会について、大規模な組織を目指さないという点と、特にここでいう二番目の方法をバーミンガム芸術諮問委員会で実践していることを中心に、その活動を紹介した。

④都市協会への期待と先導的都市協会

以上のように、3 人の都市協会論に見られた共通の見解は、①都市協会に期待しているのは行政の補完的な働きであり、行政との協働であること、②中央に対抗する地方の価値、特殊性を強く意識していること、③アメリカの動向を意識しながらも、イギリス独自の文脈の中で思考していることであった。また、ゲデスからの影響を直接受けていたブラウフォードが都市協会の重要な任務を調査に置いたのに対して、建築家であるヘイウッドはアメリカの芸術委員会との関係で、都市の外観の改善に直接的に関与する仕事を重視し、アバークロンビーは両者を重視していた。

そうした中で、イギリスにおける都市協会運動の先例として 3 名ともが言及したのが、リヴァプール都市組合、ロンドン協会、バーミンガム都市協会であった。都市協会運動の共通の価値観に影響力のある専門誌での紹介頻度からしても、この３協会が都市協会運動を先導していたと見てよい。ただし、リヴァプール都市組合は 1920 年、ロンドン都市協会は 1924 年が最後、それに対してバーミンガム都市協会は 1918 年の創立以降、1920 年代を通じて継続的に紹介された。先導役は順次、交替していったのである。

(2)各先導的都市協会の活動の展開

①リヴァプール都市組合

1906 年 11 月、リヴァプール建築協会の部会にて、シティ・ビューティフル運動を展開するための新たな組織の結成が提案され、既存諸団体の支援でシティ・ビューティフル協会が結成された。1907 年 6 月 28 日、29 日にはシティ・ビューティフル会議が開催された。会議では、一日目は「都市田園計画」がテーマで、諸外国の都市拡張の事例紹介、新規開発エリアの問題、リヴァプールの将来に関する発表、二日目は「田園都市」に関する議論が行われた。このような都市計画の生成の気運の中でのシティ・ビューティフル運動の盛り上がりを背景として、1909 年 3 月にシティー・ビューティフル協会、樹木保存及びオープンスペース協会、リヴァプールカール協会オープンスペース部会の 3 団体が合併するかたちで、リヴァプール都市組合が設立された。

組合長には、この地方の大土地所有者であった元首相のソールズベリー侯爵が就任し、一般委員会の議長にはリヴァプール市長、さらに運営委員会の委員にはリヴァプール大学のシヴィックデザイン講座の初代教授である S.D.アドシード他、24 名が選ばれた。1910 年 4 月の時点ですでに会員は 200 名ほど集まっていた。リヴァプールの市内、及び周縁部を８つの地域に分け、それぞれの地域の情報を集め、運営委員会に対して提案を行う地域委員会を設置した。前身団体である樹木保存及びオープンスペース協会から 190 ポンドの資金を継承し、活動を開始した。組合の目的は、その活動は目的で示したような論点において、一般的で効果的な公共的関心を維持することであった。

設立初年度は、ゲデスを講師に招いて「都市調査」　の可能性について検討したり、一般向けの講演会の開催などを行ったが、活動の焦点は、市当局と合同で設置する委員会を母体として、1909 年に制定されたばかりの都市計画スキームによって、郊外の美観を保全しながらの秩序ある発展を実現することにあった。成果については、1913 年 4 月の総会において、都市組合の努力によってリヴァプール周縁部の自治体において都市計画スキームが適用されることになったことが報告されている。リヴァプール都市組合の初動期の活動は、都市計画の創成と密接な関係にあった。

都市計画スキームの導入に伴う市当局への支援が一段落した 1913 年、リヴァプール都市組合は活動方針を再考し、活動の比重を公共モニュメントの内容や位置の検討に置くことになった。具体的には、キング・エドワード 7 世の記念碑をセントジョージホールの前に建設しようとする市の計画について小委員会を設けて検討し、セントジョージホール周辺は現状維持とし、別の場所での建設を提案したのである。最終的にこの提案は、ほぼ実現することになった。

ただし、引き続き、郊外部での具体的な住宅地開発や森林、丘陵地の保存にも関与していた。また、1913 年 7 月に売りに出されたリヴァプール郊外のマウントハウスの購入や、新たにリーバー卿が購入したリバティハウスの活用提案、街灯の設計競技、都市計画展示会への参加など、積極的な活動を展開した。しかし、1914 年 8 月にイギリスの第一次世界大戦参戦によって、紙の統制のためレポートも発行できなくなるなど、組合活動が制約されるようになった。この 1914 年末の時点で会員数は 220 名であった。

戦時中の 1916 年 1 月、戦争記念碑のデザイン向上を緊要の課題と、ロンドンに本部を置いた都市芸術協会(Civic Arts Association)が設立された。「どの町もそれなしでは創造、拡張し、改良していくことができない、それなしでは理性的な関心が町や村で授けられない、維持されない、そんなシヴィックアートの改善」15)を目的とした全国組織であった。リヴァプール都市組合は、1916 年末、都市芸術協会の目的が組合のそれと非常に類似しているとし、都市芸術協会と同盟契約をむすんだ。以降、リヴァプール都市協会は毎年、同盟費を払い、都市芸術協会出版物の提供の他、記念碑に関しての具体的なアドバイスを受けることになった。1915 年 7 月の時点での都市組合の運営委員会委員 22 名のうち 15 名が、1920 年末までに都市芸術協会会員となった。

その他、1916 年中には教育委員会との連携によるワイアーバスケットの設置や、危機にさらされた樹木の保護などの活動を行った。1918 年にはロンドン協会からの提案を受けて、都市協会の設立を促進するための雑誌発行の検討を進め、ロータリークラブとの間で ”City Magazine ”の発行を企画したが、実現には至らなかった。戦時中の停滞の提供は大きく、積極的な活動は影を顰めるようになった。『都市計画批評』誌でも活動への言及はなくなり、1920 年に入る頃までに都市協会運動の先導役を降板することとなった。

1932 年に作成された活動報告 16)によれば、1920 年代以降の主な活動は、リヴァプール文学哲学協会に働きかけた歴史家ウィリアム・ロスコーに関するレクチャーと印刷物の配布（1923 年）、リバティービルディングの保存に関する資金提供（1926 年、1931 年）、リヴァプール少年協会への運動場関連支援（1931 年）、新設されたシティ・ビューティフル協会への参加と出資（1930 年）などであった。

1930 年 11 月の運営委員会では、都市組合の将来について議論が行われ、現在の仕事を全て閉じ、資産をトラストに預けることが検討されたが、実現しなかった。結局、1937 年にマーシーサイド都市協会が新設された後、資産を全てこの新しい都市協会に移管し、活動を停止した。

②ロンドン協会

ロンドン協会は 1912 年 1 月 2 日にホルボーン・レストランで開催された、「ロンドンの芸術的発展とその美や性格の保全に大いに関心があり、同様の関心を持っている人々を皆集めて、重要な計画が議論されている時に、行政が無視できないような強力な意見団体をつくるという希望を持っていた」17)人が集まった会議を発端として、1912 年 2 月 9 日に、王立イギリス芸術家協会のギャラリーで開催された会議で創立が認められた。その当初から都市委員会と街路委員会の二つが設置された。前者は公共のアメニティや土地所有の状況、その制限の可能性、議会にかけられる前の全法案の検討、一般スキームが承認される前に要求される法や税の必要な修正などを扱った。後者はすべての地方機関の計画を検証し、提案される改善を記録し、新しい原理をロンドンにて確立する努力を行うことを目的とした。その後、都市委員会が改称して街路・建造物委員会となり、他にも大ロンドンメモリアル委員会、オープンスペース委員会、サウスサイド委員会、リヴァプール都市組合と同様にロンドンを 9 つに分けた地区別の小委員会から構成される地域委員会などが設立され、積極的な活動を行った。

こうした委員会活動を束ねるロンドン協会は、副会長に 34 名の名士たちが名を連ね、評議会は建築学会長も務めた A. ウェッブを議長として、18 名の委員と王立アカデミーや王立芸術協会、王立建築協会、王立彫刻家協会など 12 団体の代表者で構成され、さらにその下に、26 名からなる運営委員会、24 名からなる議会委員会を持つ巨大な組織であった。会員数も、創立から 3 年目の 1915 年の時点で、20 名の生涯会員、341 名の一般会員を数えた。また、会員の中にはロンドン近辺以外の在住の会員もいた。運営委員会にはリヴァプール都市組合でも運営委員会の委員を務めていたアドシード（1914 年にリヴァプール大学からロンドン大学に移籍）らが名を連ねていた。1913 年 10 月には、月刊の機関誌として『ロンドン協会雑誌』を創刊した。その購読料によって協会の財政面は強化されることになった。

1914 年の第一次世界大戦の勃発は通常の建設活動を休止させた。そのため、建築関係者の失業対策、そして戦時中の国家貢献という観点から、建築関係者からも「都市調査」の推進が唱えられるようになった。ロンドン協会はこの提唱を受けて、戦時中のロンドン協会の目標を「将来の大ロンドンの改善のために大いに必要とされる開発計画を用意しておくこと」とし、ロンドンを 6 つの地区に分け、都市調査を実施するガイダンス委員会

を設置した。ウェブが全体の議長をつとめ、各地区はアドシードら専門家が担当した。プリンス・オブ・ウェールズファンドや芸術家一般博愛協会、建築家博愛協会、そして各方面の個人から多額の寄付を集め、製図技術者を雇い、作業を進めた。『ロンドン協会雑誌』では、「パリでオスマンが芸術家たちの提案を採用したように、ロンドン計画が活かされることを期待している」として、オスマンのパリ大改造の下敷きとなった建築家、芸術家、エンジニアたちによる自主的なパリ改良計画案がモデルとされ、その計画の翻訳が連載された。

最終的には、1919 年に、「大ロンドン発展計画」として調査結果は公開された。ロンドンの 15 マイル圏内の地域の地図を作成し、そこに、地方当局が合意した幹線道路やバイパス、協会が自主的に提案した道路や公園、パークウェイ、オープンスペースなどを描ききったものであった。展覧会も開き、大きな反響を得た。たとえば、ロンドン住宅審議会は新規住宅地開発の申請の際、この地図を使って、提案された幹線道路や一般開発プランとの関係を検討した。

また、1921 年には、識者がロンドンの将来について自由に論じた原稿を集めて、『明日のロンドン』を出版した。協会が設立以来、検討してきた諸問題への見解も数多く含まれていた。この書籍も大きな反響を呼んだ。例えば、『都市計画批評』では巻頭でその出版が取り上げられ、クリストファー・レンのロンドン改造計画と違って、「世論の存在」があること、ロンドン協会がこの計画を受け入れ、実行していく市民の育成にも取り組んでいることを強調した。

このような調査提案、出版活動によって、ロンドン協会の信頼は増した。協会自身、「ロンドン協会の登場は明らかにイングランドの他都市で同様の動機を持っている人々の感情を目覚めさせた。（中略）我々のような中央の協会との連盟がお互いにとって利益があると思わざるを得ない。」というリーダーシップをあからさまに見せるようになった。

リヴァプール都市組合とは対照的に、戦時中の仕事で勢いをつけたロンドン協会の新規入会者数は、1920 年度 198 名、1921 年度 223 名、1922 年度 167 名、1923 年度 248 名、1924 年度 249 名で、会員は急増した。活動としては、講演や現地視察、リバートリップ、年次ディナーといった定期的な活動に加えて、様々な団体と協働しながら、保全や開発に関係する多様な問題提起、提案に取り組んでいた。

特に最大の関心は、1910 年代から取り組んでいたテムズ河の橋梁をめぐる話題であり、既存の計画を批判し、独自の提案を行った。中でも、テムズ河の南北間の交通という点と南北の河を超えた交流という二つの視点から、当局が計画していたセントポール橋の架橋については交通流を増やすだけだと反対し、その一方でイギリス王立建築協会とともにチャンリングクロス橋の架橋を強く提案した。この問題は 1920 年代の内には決着が付かず、運動は継続された。

また、この時期には、新規開発の用地として失われゆくスクウェアの保存運動にも、首都公共公園協会とコモンズ及び歩道保存協会と密接な関係を築きながら積極的に参画した。個別開発への反対のみならず、1927 年には『ロンドンのスクウェア　その救い方』という冊子を出版し、広く世論の喚起に努めた。協会は、都市計画の権限を既存市街地へ拡張することでスクウェアを守ることを主張した。

他にも、ロンドンの建物の高さ規制に関する検討、協会保存運動など、多様な課題に積極的に関与した。しかし、一方で、大ロンドン発展計画の次の作業として 1921 年 12 月に開始されたロンドン中心部計画は、財政的な問題から、なかなか進まなかった。1928 年の年次報告では、各レポートの礎としての重要性が再確認されたが、1930 年の年次報告では、「適切なファンドで、大都市の再開発を導くことができる、実用的な価値のある何かを生み出す有能なスタッフを雇わなければ、こうしたプランはできない」とされ、頓挫していることが報告された。しかし、都市計画の権限が間もなく既成市街地にも及ぶようになるので、このような計画に再び着手する機会が訪れるだろうと結んでいた。

以上のように、ロンドン協会は 1920 年代にもロンドンの様々な都市の課題に関与して、存在感を示していた。しかし、ロンドン中心部計画の頓挫に見られるように、行政の補完という役割の内実は、次第に行き詰まりつつあった。

③バーミンガム都市協会

『ロンドン協会雑誌』の 1917 年 12 月号には、ロンドン協会と同種の組織の設立がバーミンガム建築協会に提案されたと記録している。また、1918 年 4 月 12 日に開催されたリヴァプール都市組合の運営委員会の議事録には、二人の紳士がバーミンガムから訪れ、バーミンガムにも協会をつくりたいという相談をしていったことが記録されている。こうして、先導的市民協会との関係をつくった後、1918 年 6 月にバーミンガム都市協会が設立された。

会長にプリマス卿を迎え、28 名からなる評議会、8 名からなる技術委員会という構成をとった。評議会、技術委員会の委員でもあった名誉幹事のヘイウッドは、この設立の年に『バーミンガムの発展』というバーミンガム

の都市改造プランを解説する本を出版していた建築家であった。

ヘイウッドによれば、評議会は、会員数を増やすことよりも、まずは自分たちのチャンスや能力を試すという決定を早々に下した。その背景には、バーミンガム都市協会はバーミンガム公益ファンドからの毎年300ポンドもの資金提供による余裕があった。バーミンガム都市協会は、この資金で、協会の目的を達成するのに必要な土地を購入することができたのである。実際に 1920 年以降、公園や運動場用地を購入し、整備費とともに市に寄附する活動を行った。

設立翌年の 1919 年には、市の支援を受けて、ストリートアクセサリーの設計競技を実施したり、旧村落が残るノースフィールドで、都市計画スキームの制定に先立ち、市当局の協力を得ながら、集落の保存を前提とした開発計画案の設計競技を行った。ノースフィールドでは最終的には都市協会の技術委員会自体で提案をまとめ、市に提出した。

以上のように、バーミンガム都市協会は、有能な幹事、潤沢な資金、バーミンガム市との強い結び付きという幾つもの利点を有したかたちで活動を開始したのである。

アメリカの芸術委員会をモデルとした審査機関設置の提案も、バーミンガム市との強い結び付きを背景として実現したものである。1922 年 6 月に、バーミンガム市長を会長として、公共事業局の局長、教育委員会代表、大学教授、芸術学校校長、建築学校校長、建築協会会長、そして都市協会会長と名誉幹事のヘイウッドで構成される芸術諮問委員会が設置された。その役割は、市所有の土地に建つ建造物や、街路、広場、公園、彫像、モニュメントなどのうち、市関係当局によって芸術諮問委員会に提出されるものについて、レポートを作成するというものであった。

都市協会と芸術諮問委員会との関係は、「共感的独立」とされ、都市協会の年次レポートには芸術諮問委員会の記録は掲載されず、別に独自の年次報告書を刊行した。

バーミンガム都市協会は、1920 年代には、市の公園委員会からの要求に応えて、リッキーヒルの整備計画やアストン公園の再整備計画を立案し、後者については市当局、そして都市協会自身の費用によって実現させた。更に、バーミンガムの中心駅であるニューストリート駅周辺の街路計画に対する提案、17 世紀に建設されたストラドフォードハウスの保存への支援など、様々なプロジェクトを展開した。

こうした都市の物的環境の整備に力を入れる一方で、閉鎖予定であったレパートリーシアターへの支援（1923 年~1924 年）、バーミンガムスタジオオーケストラの人員削減の回避策の提案（1929 年）、など、都市生活を豊かにするものであれば、空間整備に拘らずに活動を展開した。

バーミンガム都市協会は 1923 年の年次報告書で、協会の仕事が他都市の注目を集めており、同様の仕事を望む人たちからの相談をしばしば受けていると報告していた。そして、1924 年設立のニューキャッスル協会など実際に同盟関係を結んだ都市協会が運動を広げていったのである。

(3)まとめと展望

以上のように、都市計画が行政府の仕事として確立していく過程の当時の都市協会論では、アメリカのように行政府の腐敗もそう深刻ではなかったイギリスにおいては、都市協会はあくまで補完的機能が期待されていたが、その補完とは市民意識を高め、地方分権を押し進めることであった。実際に運動を先導した協会の活動も、そうした地方的な問題に限定されていた。しかし、リヴァプール都市組合やロンドン協会が郊外地開発の都市計画スキームから既成市街地も含めた都市計画へという展開において、常に行政を先取りする意識で活動を進めていたのに対し、後発のバーミンガム都市協会は行政と歩みを一にしていた。都市計画が行政によって掌握されていく中で、リヴァプール都市組合やロンドン協会ではない、バーミンガム都市協会が都市協会運動の先導役に自ずから出てきたのである。近代都市計画史を、このような行政と民間組織、市民との役割分担や関係性の変遷の歴史として捉えることは、現代において、都市計画の主体とは誰かという問いを思索する際の歴史的なパースペクティヴの構築に繋がるだろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

中島直人、「シヴィック」の文脈　都市美運動の世界史からの考察、都市計画、査読無、276 号、2008 年 12 月、25-28 頁、

〔図書〕（計１件）

中島直人、東京大学出版会、都市美運動　シヴィックアートの都市計画史、2009 年、500 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

中島　直人　（NAKAJIMA NAOTO）
東京大学・大学院工学系研究科・助教
研究者番号　30345079